

梅窓園畫

英傑三國誌傳

秋州菴著

三輪恒雄氏寄贈



舉右府信長公事跡換叙

嗚呼織田氏以同山倒海之勢頓受翻蟻蟻亦其驕暴自速也己爭奪之世豕狼其心者不特一光秀則復誰咎乎有

國者足取鑒戒矣然世睹其不令終往々詬之不容口焉至於其有功乎名教者則槩乎不錄抑亦頗矣夫足利氏之季

王室極其衰當時公在尾張 正親町天皇託用幣熱田祠

密詔令 朝廷衰絀茲究縱橫卿盡忠圖 王室清天下

因賜奇香暨衣一稱於此公常懷大志終定霸於其際威振

A280

713

中原既不該有挾而能不忘所尊以攻伐倥偬支費廣濶之  
 日營禁宮辨供御修缺舉廢慶覃播紳茲從源賴朝已來  
 朝政衰伊勢兩宮類圯永式絕數百年公之奏天朝悉  
 復舊制先所以全朝命也此諸本曾北條悖逆滔天者薰  
 猶相反矣且其不惑乎異端邪妄之說不爲無所見乃燔叡  
 山屠長島擠大阪殺其凶焰以惠後世假之數年以就其志  
 乎則彼誣惑之尤者或幾乎惜夫

南壽山人誌

織田信長公之像



木下藤吉郎之像



織田正二位右大臣平信長  
 相武天皇の後胤代々斯波武  
 衛の家弟より父備後守信  
 秀が代筆を以て其主を廢し  
 尾州を以て信長十二歳  
 まで三州大將を以て初陣不  
 敵を破り弱冠より智謀勇畧  
 兼備へ人を用ひの英才大度有  
 今川義元を尾張捕殺阿比  
 孫少佐より美濃を以て亂入し  
 奇藤竜魚を討ち將軍家



を扶く佐々木兼頼を追て三好  
 の剛毅を憐た勢小北畠親興  
 を降し比叡山を焼討と悪僧  
 を誅戮し後足利義昭と不和  
 とあり遂にその安藤を逐て  
 將軍に任し東大寺の蘭奢  
 待の名多を旧例ふりせ一寸  
 八分を切り江の小浅井朝念  
 敗亡し安主は居城を築き武  
 田勝頼父子を天目山に討ち  
 中國出陣の為三百餘人あり



信長公

京都本能寺小菰宿のあつ  
 明智光秀謀叛を企て大軍を  
 以て不意に押寄せむいそ働き  
 生害しつゝ御茶屋四十九榮際  
 天正十年なりと云ぬ天文年中  
 より四海の内は擾らけし武威を  
 以て天下の兵乱を切詰め民を  
 塗炭の中より救ひ四方の故を  
 其英名を鬼神の如く恐れ  
 振ひ大業既小菰宿のあつ  
 逆たが為に弑せられむいそ



画面小男り、此作

口傍々れ此の形大徳寺より英  
 物見院殿贈大相玉二品泰巖  
 大居士と益して智るあがら孤  
 疑治し魏武帝曹操は櫛ふ  
 織田三位中将平信忠  
 生質武勇終倚りて戦毎小  
 勝びることたり 中將信忠高  
 遠の城責小衆軍を麻し自ら  
 一番衆をりてふ中国野戦の爲  
 京都二條城に宿しすひら  
 光秀が叛逆を父を救きん

比叡山  
 焼く  
 あり  
 づ  
 國



と左合軍勢を百人を以て  
 馬に鞭を打ちて小落武者来  
 又大田原の生害の空けえ  
 思慮を白しりてあはるる代  
 村井長守地守り途中の交  
 戦利をへりて一先要害よ  
 待拵へ一戦をへりとすぬ覺  
 寺小宮原の織田源三右衛門  
 楮子兵助村井が後兵羽衣の  
 法士退く小落り上下七人



亦も成なり小こ光みつ秀ひでが軍威ぐんいをあらわて  
 八百やう人にんあらて二に条じょうの  
 城しろ防ぼ我がうらるる終つひ小  
 生せい害がいをあらわする魏い曹そう正せいよしはい次つぎ  
 小こ島しま左さ将しょう平へい信しん雄ゆう  
 信のぶ長のちかの二に男をとこ幼わか名な茶ちや筈はな九く小こ島  
 信のぶ意いのさ長のちかとあり勢列り下  
 園のちをあらわする右みぎ府ふ生せい害がいのち后  
 家け督とくをあらわする争まひ滝川がわ一いつ益えき稻いな葉は  
 通と朝あ氏し家け行ぎやう座ざのちをあらわする  
 信のぶ孝かう勝かつ家けとあらわする合あせ秀吉きちを



亡なさんのちのち後のち秀ひで吉きちと和わ睦ぼく  
 却かえて信のぶ孝かうを責せて是こゝを殺ころする後のち  
 筆ふで内うち九く小こ島しま一いつ亦も常とことあらわする称  
 曹そう揮きがあらわする男をとこ曹そう彰あきとあらわする  
 神かみ戸と侍ざい従じゆ平へい信しん孝かう  
 信のぶ長のちかの二に男をとこ神かみ戸と人にん盛さか久ひさが  
 忠ちゆう心しん伐ばつのちおお横よこ津つ進しん攻こうはは津つ南なん  
 小こ兵へい船ふねをあらわする渡わた海うみのち順じゆん風ふうを  
 行ぎやうくる内うち急きゆうのち大だい変へんをあらわする大  
 坂さか小こ島しまをあらわする會あひ一いつ秀ひで吉きちとあらわする



張一猛威を振ひて我へども  
 寡一衆を敵せしむ軍八を一朝  
 と腹十文字は擡  
 切く知る実小悟り也  
 軍おちり魏右將軍徐晃は  
 坂井大助の心向  
 織田の功長津川の合戦は先  
 鋒の大將として儀形丹波が  
 勇威は碎りし二の目には我  
 長政が本陣目録攻入は遠  
 若き大志の浅井中助のよ

明智を討后家督を争ひ柴  
 田滋川と合体し使早小菟城  
 竟小科を討つて九才少尾池  
 内海を自殺す曹操が子曹  
 植あなごころみ  
 本林之左衛尉可成  
 徳田家右名の長江小姉川の  
 合戦小勇名を影し回國字  
 佐山城は信治とそ小菟城を  
 浅井お倉兩家の大軍来る  
 とさくくを幸し町口よ出

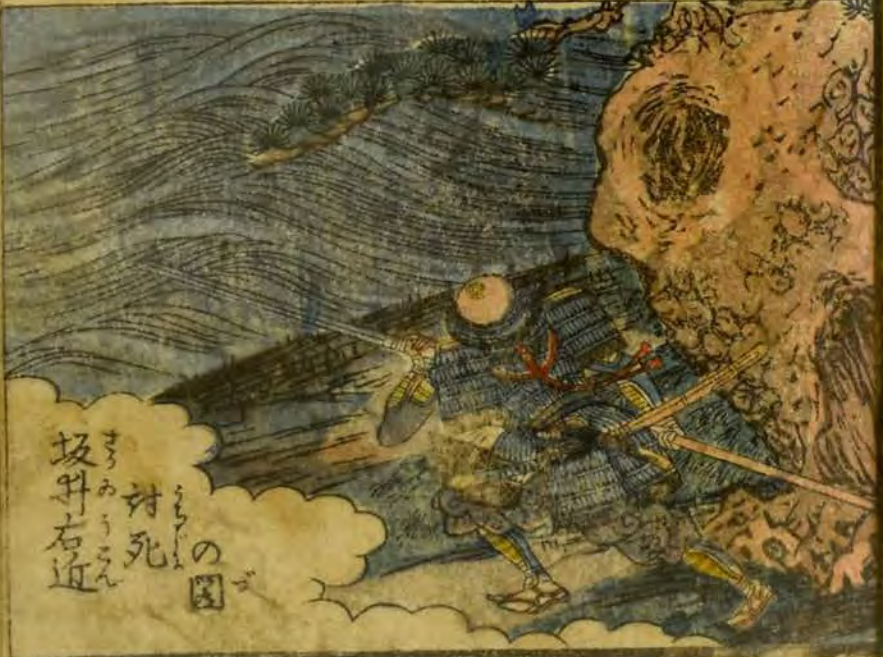




切立しき敗走しんそそをいふ  
 比叡山に陣を信長と對陣し  
 敵方の名糧屋田の浦小積多く  
 糧米を奪ふ兩家のお士を  
 右近十分は戦ひ腹を掻切て  
 堅田の浦小戸を肆と名を今テの  
 世おおしくる魏の後將軍文  
 聘とい



坂井久藏  
 右近が一子十三歳ゆくと佐々木  
 の勇將建部源八郎を討ちて  
 信長の意状を納り姉川合戦  
 浅井お本陣小切入十文字の鎧  
 を引き長政月夜池もくを  
 續く味方もあがりなり長政  
 の近長支へ戦あを元来毎双の  
 若者あまは右と左へ突倒し  
 近長老を取とく授のけ出討小  
 多負死人の山を原長政があ



坂井右近の討死の圖

三及むらり小必々事バ浅井の勇  
 長早中右馬允も討一人の久  
 孫少銀地百餘挺筒先を擧へ  
 一矢中お殺せむむざんある事  
 胸板は玉四らお的られ其まう  
 倒き死しり実中勇ハ魏の破  
 虜獨軍李典がごとく  
 惟住る仰左馬尉長秀  
 其先兒玉黨廿々勢成武衛の  
 代あり信長の臣と  
 あり織田家系牙柱石の将殘

野の押とて屋敷の城を  
 遂小負満をりて信長小居せむ  
 山崎の戦小母友内を分り強敵  
 を破り賤ヶ嶽小秀吉を助け  
 戦功勲なれ友小常小癩病小苦  
 小む後小病ありて死す  
 の時中より我腹力と突ぬ  
 塊物をしむ我を殺す  
 まう汝をころす  
 塊物の形をば  
 脊小刀疵ありと人典医



竹中法外の家不藏と魏の鐘

柴田修理進勝家

織田累代の言に始持六と称

江州を去るの城は佐米承

復と戦ひ水のみを断るとい

ども少しも屈せぬ防戦を数日

水小渴しをば野(原)水瓶も

瓶突碎きおぼ

付ゆく勇戦をとい

復

其二



を破る長刀一揆と戦ふ不殿を  
勤めり太股を鉄炮少てお扱  
り人討たる千後北國の藩  
越中小園ふ折る京都の大隻  
をゆ戦を打捨近登るを上杉  
勢追お加越の國境まで喰苗  
勝家若狭ゆくをま  
引返して戦ひ敵を退拂ひ  
清洲不集舎の家督評定小



未乃吉口が六志をあらり盛政をして  
 そを殺ししめんとい其先見実  
 小吉の計畧して亡き  
 軍に何れ九人の計畧して亡き  
 怒り信孝と心を合せ後ヶ嶽小  
 羽軍と戦ひ一戦も亦負小吉在  
 して生害も智足さるる何れも  
 勇ま死あもつて天運あり  
 魏の草創は犬お軍夏候悖  
 よ比せ



佐久間玄蕃元盛政  
 勝家が甥か賀天をもちの城主  
 堀口中村が上帯を極て宙よ  
 の後兵七八人を一時討た賤  
 ヶ嶽は中川法秀を討敗軍小  
 及び金材持をお振敵を討り  
 救志し御天神のみ秀吉  
 馬前よ進むよ小秀吉は踏張



两眼くらりと見開き推参ある  
 下郎めと白眼し人バ玄茶あが  
 頭小百子の雷一閃小落かつが  
 めく馬共小泣きさうりまごも  
 かあハガをそそり落し途中  
 まて悪田の伏兵はあふま捕ま  
 誅戮せしる勇あれ  
 魏の許褚も此  
 明智日向守惟任光秀  
 源氏累代の嫡流も福若守  
 頼清が後胤もてお代濃州

必智小住居一明智と称ま弘  
 治の比より永禄九年の事まで  
 身をもろ居り一信長の  
 招き小よつと波卓小果り織田  
 小仕へ目く月く小武功を励み次  
 身立身して元禄二年西近  
 江を切随へ天心三年丹波を討  
 ち救軍の間力をあつて終小丹  
 波卅七万石を領して元禄后天心  
 十年五月九日回領召上られぬ



石見二ヶ國を下するべきに上使  
 共小我武勇の陣先を以て切え  
 十七年信長思顧といふありて  
 先月甲辰にて非道の  
 信長自身券を以て其が臣を  
 打ひひより幾度り恥辱を心  
 び臣下の心を以て恨を  
 發せざりし難題を仰  
 らし上八事をも滅亡の時



是非小及する次第之を月下  
 旬信長上洛を以て其の  
 其時をが報を以て其の  
 立越おゆる股肱の者へも中候  
 ト計をおしむべし  
 出陣の用意をなすべし  
 公へ暇を乞安土を立て坂本  
 して改りし心の中をひやられて  
 いんごころをうりて一日來教



のりよと

如もぬ人の何ともいふ

身をも惜まど名をも惜まど

六月二日終小信長を討ち去る

遠征よりでも十日さるる内

農兵のふお討つて天恩

辞世の句

浄願無二門

大道徳源

五十五年夢

覚來帰一元

魏主を殺せし司馬昭

明智十兵衛尉先登

浄願無二門 大道徳源

五十五年夢 覚來帰一元

魏主を殺せし司馬昭

省源木候

時ハケル...

水止まる...

風人...

秋...

右面十勺末の句ハ...

先秀...

先秀...



多も多も破すすむる世のト 心持  
 光秀 行渡と東野外常路の後亂  
 み々倭奴連方の達人あり此  
 光秀ハ光秀が嫡子十四歳父が  
 殺運を夢一入がひ終不病死す  
 是を可も言ふは  
 本林武守長可  
 三左連可成が嫡子猪子信房  
 更科の城を智勇兼備の猪子  
 中太田口の戦小上杉の勢を破り



穂の目も七尺余の大身は滄を  
 中を能く操る小突立事バ上  
 放勢 老麻のぬしそれより  
 國人の心を取堅ち戦後へ  
 働き飯室野虎の道不敵の首  
 塚を築た京務が居城近き関  
 山まで切入三本杉は陣するか小  
 京都の大変をなす者抱もどろり  
 敢て信房の居城へ降り伊奈の  
 城主毛利河内守を相付ひく





亡君の讐を報せん為早と上方  
 へ打立んとし人等長可よ許へ  
 足下上洛せんとの企あり我々が  
 人質を早々還しやさるべし若  
 此儀同心あり不於てハ我兵を  
 構へ上洛の路次を妨ぐべしと云  
 長可をよめて大に怒り汝等  
 右大臣家の変を我勇氣たや  
 せしむんとて其河をぬす  
 ありんたあり汝等十分多執  
 を俾り只今一戦一某を討て

先考小栗栢  
 野中  
 余のつ



其の上にて人質を返さるべし我  
 命のあり限りハ汝をせりと罵  
 擬ふ  
 徳山五丘の衛尉  
 越中國の佐人勝家と上杉勢と  
 越中魚津の城外小於て合戦の  
 とに上杉は將士の田を奪ち  
 勇威摩利支天の如く  
 色めたりと徳山おかしき勇士  
 ありんた小勢を引包んと討



取べし越後勢の軍立ハ心憎さ  
 扱ふも鎧の穂先を扱へよ  
 款の馬を突發おとす  
 とも突捨あてて首をな  
 後へ引強兵ハ味方ありとも突  
 殺せ進めくと下知をあり味方  
 の中を十文字小衆也死せよ  
 勵りたるを御戦功人の身目を  
 踏りしす魏の車騎將軍郭淮  
 とす  
 明智九馬助光春



始三宅赤平次光秀が股肱と  
 まれ本願寺戦の後隨身の軍勢  
 六百余人あり江ノ安土城小打入  
 あり以来國土を懐け江ノを  
 平均し居る中江ノ合戦味  
 方敗績し大將光秀并小溝尾  
 進士比回ホ自殺せし  
 爰也て独々死せんよ坂本の  
 城に入城代長閑秋向州の妻子  
 等と安否を共小せん安土の城



子火をうけ坂本へと還兵子作人  
 也と乃を意く如小野武士爰りと  
 小野を事ともせ打破て近  
 通りさんく小我ひく打出の傍よ  
 忘せ時軍兵或ハ討まこ又落城  
 二百余人とあり跡及を急ぐお  
 池田惟住城守が二万人と出合  
 けしと恐まばり園木橋人等と  
 喚く鎬を削り穉を破まて志お  
 つく戦へハ堀が勢勇威小打崩さ  
 是三町年を迹くろる味方を足



目六終小十にめ務皆海まき流  
 をる命存命ベき老一人もた  
 光春渡を流し汝ホ皆海を負  
 ころもか此期ゆかりく主従の  
 契約なきつそこの不討死を遂る  
 才忠臣の世まうハ忘るべたのぞ  
 心よく討死まへんと三尺の太  
 又志向小若くす一教子路の中へ  
 真二文字小切入まは堀惟住が勢  
 四方よりを圍む討まふはあめ  
 後兵一人も結らば討まふれ今



明智  
 秀満

八景よまゝくちをうと喚て只一騎  
 堀がまゝ百人の中へ突入近き共  
 士を切替或ハ蹄ようけ忽一路の  
 死人も無く突抜て湖水の中  
 へ乗込ごうまて其日の出立ハ黒  
 糸の落紅を感しまゝる鎧を忘  
 白銀星の塊は徳をメ大廉  
 毛といひ猶足小まの徳を空  
 百子徳の尻がハ槍立斗の牛よ  
 凍有ハ此頃の熊画持也永徳が  
 画ハ雲霧の白綾は陣羽織小



緋のうらみしを陸の上より被ぎ  
 声をうけ身ををくれ引上くおまを  
 ハ風流といひ武勇といひ実小  
 還ハ武士ありと教子の軍兵  
 一時ふよのやうくも言るる長色  
 湖の浪小空まきつて波らも止  
 さりたりこれを魏の郵文とい  
 明智治右衛門光忠  
 丹羽八上の城主光秀が後身也  
 勇技群 股肱と頼まれ三条の城  
 妻小後炮のうらみ海をを履ひ



知恩院にて治療せし小山侍表  
 敗績日向一宗滅亡を宇家  
 佐野丹波の公へ退たると勅む  
 光忠完承と歎ひし  
 惟ぞとあれ名あれば君も情ひん  
 とうるたれはハハのふれぬ

とり古款を録し吟  
 自殺しつるまは二反の家は渡と共  
 其屍を収め心は落しきり  
 魏の蔡瑁を擧ぐ



瀧川左近将監一益

織田家功長の其一個武田滅亡  
 の後上州を初め関東管領は命  
 ぢこれ海老原名馬を下され  
 相沢小回京小糸氏政と合戦して  
 屢威を震ひしが明智が及逢を  
 まく軍中の諸將を集め志を問  
 決士一益が至剛に服し流人  
 質を献じ二心を成し一益  
 大の赤びゆる八雲東の大敵を  
 まは快く一戦をとりげ勇威を隣



國子示し上洛をせし武后神  
 奈川(ま)の勢と烈しく戦  
 ひ終におまき倉ヶ野の城へ入  
 其夜(ま)人(ま)小暇をつげ今日の合  
 戦(ま)あつて大感限る我上  
 國の後ハ皆(ま)多(ま)随(ま)居城安堵  
 致(ま)さる(ま)武門の礼義(ま)とあり  
 とて人質(ま)を返(ま)せり(ま)終夜酒  
 宴(ま)を催(ま)し(ま)猿樂(ま)を興(ま)し(ま)自身  
 鼓(ま)を打(ま)き(ま)其(ま)勇(ま)を軍中(ま)に  
 森(ま)長(ま)可(ま)が(ま)人質(ま)を殺(ま)せし(ま)天地



懸陽の遠あり実小信長の目  
 勝家(ま)の妹(ま)舞(ま)あり(ま)秀吉(ま)を亡  
 さんと計(ま)義(ま)を思(ま)ひ(ま)却(ま)て秀吉(ま)を  
 小(ま)没(ま)落(ま)し(ま)切(ま)方(ま)を(ま)と(ま)魏(ま)の  
 征(ま)西(ま)将(ま)軍(ま)夏(ま)侯(ま)淵(ま)は(ま)喩(ま)ふ  
 織田七兵衛尉信澄  
 武藏守信行(ま)子(ま)幼(ま)名(ま)於(ま)菊(ま)丸  
 尼(ま)ヶ(ま)寄(ま)十(ま)万(ま)石(ま)を(ま)修(ま)て(ま)大(ま)坂(ま)の(ま)城(ま)中(ま)に  
 て(ま)吊(ま)合(ま)我(ま)の(ま)評(ま)美(ま)と(ま)り(ま)多(ま)く(ま)惟(ま)位  
 ナ(ま)タ(ま)ハ(ま)信(ま)澄(ま)ハ(ま)先(ま)秀(ま)の(ま)聲(ま)を(ま)て(ま)余(ま)も



父を信長公に殺さしむる事  
 の驛かき秀一とて是をせりと  
 評すの事信澄が家来朽木白  
 坂及忠人を老秀と一味の始末書  
 札に偽り信孝へ注進せしめ信  
 孝も出信澄叛心ありとせし  
 しといふ事も知らざり亡君の吊合  
 戦を覚えむまより申渡す子細  
 あまは早く大坂へ来りてと  
 申せりバ彼逆意を扱わば  
 疑まらんことを恐れて必来るべし

其の時討死ん小何の狩りあり  
 此義然るべしと尾崎へ使者を  
 遣り右の次第を言入し信孝  
 之意は遠く大坂へ赴くべしと  
 返答せしめ用急をたしめ  
 として岸山路を歩くと定り間  
 毎小力者を伏せ置入りて  
 待居し信澄密事露れを  
 あつて自ら勇をたしめ大  
 坂へ来り頻て二の丸へ入りて  
 岸山路のあはれしく向ひて討



織田 信澄  
 亡の事

の間、詰り入るを右よりあそをか  
 け遁まきりし、心得し  
 と抜合せ戦ひ、信澄が身は夫  
 事小及びび、遠来を倒けと  
 大音お呼そり、強勇の信澄落が  
 左の脅を切割、大いあ叫ぶと  
 足さし山路、目の上より頬か  
 まちん切付、眼血入と  
 傷見得ど、惟住が良上、回主水  
 並来り、只一刀付、苗さ  
 魏の曹真はは



右の  
 曹真



